

---

# 夏休み

百合姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏休み

### 【Nコード】

N7925V

### 【作者名】

百合姫

### 【あらすじ】

< 僕 > の夏休みの始まりは。

**(前書き)**

初めての投稿になります。

一年で一番暑い陽ヒカの月、僕は旅に出た。  
家から続くなじみの一本道をずっとずっと歩いていく。  
ただそれだけの、旅に。

\*

\*

\*

白い、小石だらけの道のはしに、見つけた。  
ピンク色に近い、あかるい紫色をした、ちいさな花。  
ひっそりと背の低いカン木の葉陰でゆれる、白い花。  
まつさきに<僕>を迎えてくれたのは、そんな小さな夏の花たち。  
気付かぬあいだに移ろっていた季節を、自然を、感じられること  
に感謝したい。

いつもなら気づきもしない、小さな存在に、そう感謝。

夏なのに日焼けしていない肌の色を気にする、先ほどまでの<僕>  
>は消えていた。

……わくわくする。

なぜか解き放たれた気持ちになる。

開放感と、こういう場合は言うのだろうか？

<僕>は珍しくちょっとばかりリクツっぽく考えてみて。

プツ、と吹き出した。

似合わない。

<僕>らしくないことなんて、するもんじゃない。

それにしても、<僕>らしい、って、どういうものなのだ  
ろっつ？

曖昧あいまいな言葉にかすかな不審と不安が心に忍び寄ってくる、そんな  
気がした。

道のずっと先に、人影が見えた。

誰か知り合いと出会って旅行気分を壊されたくない<僕>は、あわててひからびた道から外れた。

都合よく大きな木が立っていた。

大人の横幅よりずっと広い、木の幹の裏側にピタリとはりついて……ザラザラとした感触が頬に痛い。

しかめっ面は似合わないの、<僕>は姿勢だけを正した。人が通る瞬間を、やりすごす。

そのついでに、そおつとのぞいて。

誰が通りすぎていくのか。そして<僕>のこと、その誰かは気付いていないだろうか、と確かめてみた。

見えたのは、一様に暗い表情をした何人かの大人達。

ザワザワと木の葉が風に揺れる、互いにこすれあう。

重い靴音。

陰鬱とした色彩の服。

黒は弔辞ちよつじの色だ。

胸がざわめく嫌な光景に、<僕>はきびすを返した。

つま

りは、逃げ出したんだ。

いばらの葉壁をかきわけ、小さな小川を飛び越えて。

できるだけソツと通り過ぎたのに、昔も作ったひっかき傷ができていた。

懐かしい。と笑う<僕>。

再び戻った道に、人影はなく。鼻歌まじりに歩き進む。

そのうちに、道がふたつに分かれていた。

右へ行けば村の中央にある広場へ。

左に行けば学校がある。

今のく僕>は誰かに会う気はなかったので、夏の長期休暇中の学校に向かった。

誰もいないから。

道ばたに木の柵がある。

古ぼけ、ペンキのはがれてきたそれは、二年ほどまえに悪友がしでかした悪戯のバツとしてぬらされたものだ。

青々とした下草に、黄色の木の柵。

あの時の大騒ぎとその顛末を思い出して、く僕>は笑った。

すでに習慣となつている、笑った後の恒例行事。

胸に手をあてて。 あれ?と思う。

声を上げて笑っても、胸が痛くならない。

呼吸が苦しくならない。

ゼイゼイと、いつもなら胸の奥のく僕>の心臓は悲鳴を上げているはずなのに。

なぜ? と思う。

けれど。

なぜ? の答えをさがす前に、く僕>はこう思い直すことに決めた。

もう、好きなときに好きなだけ笑ってもいいんだ! と。

また、解放感をひとつ感じた。

サアアア………、つと風が下草をないで走り去る。

柔らかな緑の葉が、く僕>の踝にやさしく触れて、離れていった。うたるとような真夏の真昼。

太陽は元気に空のド真ん中で強烈な輝きと熱をはなっていて。

あまりの暑さに、小鳥のさえずりもなければ、夏の羽虫の姿すらない。

ここでく僕>は、もうひとつのあれ? に気付いた。

これだけ長時間そとにいれば、普段のく僕>ならとっくの昔に熱

射病なり、脱水症状なりで倒れているはずなのだ。

なのに、今日の<僕>はなんともない。

ラッキー。と思えば気は楽だろうが、あいにくそこまでお気楽にはできていない。<僕>は、とりあえず適当な木陰に入って腰をおろしてみた。

これは、考えるときの<僕>のくせ。

走っちゃダメ。感情を高ぶらせてはダメ。なによりムチャな行動はできるだけ避けること！

医者にも親にも幼なじみという名の悪友にすらそう言われ続けてきた<僕>に唯一できた事が、涼しい木陰に座り込んで、楽しそうに遊び回る学友たちを眺めることだった。

時にはふわふわの枯れ草の上に寝転がり。

時にはあたたかなストーブのそばで窓越しに。

寂しい。と感じる前に、誰かが両手いっぱいのお土産を持ってきてくれる。

よけいに切なかった。

記憶の中の自分自身は、常に孤独を感じていたのだろうか。

そう、今この瞬間のように。

ふらり。立ち上がる<僕>。

何かに誘われたみたいに、なだらかな丘をよこぎって。

もう、青空をはしから隠していく真っ白な入道雲も、美しい模様を作り出す木漏れ日も、ツル草をはやしたお化けケヤキだって目に入らない。

いつかはぜったい探検しようと思っていた、ボロボロの水車小屋だって、今の<僕>にはただの通り過ぎていく風景。

足早に、何もかもがせまっては遠ざかっていく。

小さい時、夢中で遊んだ大きなブランコがぶらさがる、ニレの木も。

村はずれの白樺林を抜ければたどりつく、悪友とふたりだけで作  
った内緒の秘密基地も。

どれだけ大切だったろう。

幼い日の宝物。

でも、もういない。

走り出す。

初めて、力いっぱい駆けた。

誰も止めない。

< 僕 > もやめようとは思わなかった。

駆けて、駆けて、駆けて。

つまずかないのが不思議なくらい走って。

胸が痛い。

いつもの発作とは違う、けれど確かに痛い。

たぶんこれは決別の痛み。

何かから解放された < 僕 > 。

けれど、確かに何かを失った < 僕 > 。

カラダが、ココロが、千々に引き裂かれるような感じ。

でも、 < 僕 > は振り返ろうとはしないんだ。

きつと。

いや、ぜつたいに。

\*

\*

\*

目の前に、見慣れたにんじん色の髪がふわふわと風に揺れていた。  
「頭に血がのぼるよ」

ほとんど口癖になってる、この台詞。

また君に言えたね。

太い木の枝に逆さまにぶら下がって、悪友がスネたように唇をと  
がらせていた。

「お前、遅い」



声とともに木の葉が、落ちてくる。

木の葉とともにしなやかな少年の身体が、落ちてくる。

器用にくるんと、宙返りして着地。お見事！

「待ちくたびれただろー」

ぶんぶんと、相変わらずありあまった元気をもてあます様に、彼は腕をふりまわす。

その、あまりにいつも通りな姿に。

「ごめん」

あやまるより先に、ふわっ、とく僕>は笑っていた。

そのせいで何か言われるかな？ とか身構えたりしていたのに。

「よし。じゃ、行こっか」

あんがい素直に悪友はうなずいて。

目の前に手がさしだされた。

日に焼けた肌の、そこだけわずかに白い手の平を。

「うん」

僕の夏休みはこれから本番！

(後書き)

最後までお読みくださり、ありがとうございました^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7925v/>

---

夏休み

2011年8月15日03時27分発行